佐伯　胖（編著）
『子どもの遊びを考える―「いいこと思いついた！」から見えてくること―』
2023 年　北大路書房　四六判　248 頁　定価（本体 2,400 円＋税）

関根　佐也佳*

遊びが面白くなる時、それは、ふとした瞬間に訪れるアイディア、いわゆる「いいこと思いつく」瞬間にあるだろう。だが、現代の日本において、子どもの遊びとは自発的な活動であるとの認識が一般的である。遊びの最中に子どもが「いいこと思いつく」時、それは、子どもがいいことを思いつこうとする意思とは関係なく、突然に降って湧いてくるものであり、自発的な活動とは言い難い。現在の一般的な遊びの見解に基づくと、この降って湧く「いいこと」は説明が困難な現象といえるだろう。本書は遊びの中で子どもが「いいこと思いつく」瞬間への着目に端を発し、全章を通じて、自発的ではない遊び、子どもたちに「いいこと」が降って湧くことで生まれる豊かな保育実践について、多様な観点から探求を重ねている。本書は、子どもが「いいこと思いつく」時こそ、子どもたちの遊んでいる瞬間を象徴する場面であること、さらには、おもしろさが花開く瞬間とも捉える立場を取り、まったく新たな視点から遊びの展望を見出すことを目的としている。本書を通じて行われていることは、我々が一般常識として捉えている「子どもの遊び」について、根源的に問い直すパラダイムシフトであるといえるだろう。

本書で着目すべき点は、子どもが「いいこと思いつく」遊びの瞬間を捉えるために、関係論という捉え方の中で、中動態という動詞を中心に議論を進めていることにある。まず中動態とは、本来は文法の態を表しており、能動態–受動態が主語の意志の存在を前提とし、動作の方向性を問う区分であることとは異なる。具体的に、中動態とは主語が行為の過程の内側にあるものとされる。例えば、本書では中動態の例として「産む」「産まれる」という言葉を例に挙げ、具体的に説明を行なっている。一見すると、母親は子どもを「産む」ために能動と捉えられ、子どもは「産まれる」ために受動と捉えられる。だが、母親は産む時期をコントロールできるわけではなく、子どもも産まれる際の頭の位置などはそれぞれであり、母親によって産まれる状態が全て決められるわけではない。このように、行為者が行為の外側ではなく内側に存在し、行為者も行為の過程に変化を受ける様態を中動態という。そして中動態研究とは、このような中動態を言語だけではなく思考の枠組みとして用いた研究を指している。つまり、活動が能動的か受動的かという二項対立関係について、その前提から問い直すこと、新たな展望を見出す試みといえる。では、上記のような中動態研究を議論に交えることで、本書では、現在の遊びの定義からは取りこぼされがちな、子どもの「いいこと思いついた」瞬間をどのように捉え、新たな展望を提示しているのか。本書における中動態研究の視点を語る上で欠かすことのできない関係論との繋がりを中心に、紹介していきたい。

本書における子どもの「いいこと思いついた」を考察する議論において特筆すべき点は、関係論を基礎とし、中動態から子どもの遊びを見るが故に、因果関係によって子どもの遊びを捉えていないことにある。つまり、主語と動詞の捉え方が従来の見解とは全く異なるのである。先に述べたように、中動態研究とは、能動と受動のような二項対立関係を前提から問い直す試みである。そのため「中動態における主語」は、何においても先立って存在する一貫した自己という主語の捉え方ではなく、周囲との関係性の中で常に変化し続ける自己を主語として捉えている。そして、その主語は、周囲との関係によって影響を受け変化し続けるだけではなく、その変化によって新たな出来事を生み出す「場」ともなりうる。このように、「中動態における主語」は、動詞の過程との関係の中に生まれ、常に変化し続けながら、周囲にも変化を生み、また変化し続けるといった、まさに関係論的な存在である。本書の中でも、中動態における人間観は関係

* お茶の水女子大学大学院博士後期課程　科目等履修生

のなかで存在する人間観であるとの指摘がなされており、中動態と関係論は相補的関係であると述べられている。そのため、中動態の観点から子どもの「いいこと思いつく」瞬間を見るということは、子どもが一方向的に何かを行ったという因果関係としての理解ではなく、子ども自身も含めた周囲の環境や文脈、人々との関係の総体が常に変容していく中で、「中動態における主語」としての子どもに起こる変化の結果として捉えることができる。本書では、子どもを取り巻く様々な環境、文脈、人々との関係を「関係の網目」という言葉で表している。この関係の網目が変容していく中で子どもも変化し、生まれてくる現象、それが「いいこと思いつく」瞬間である。

本書はこのように、関係性の中に生まれる主語としての子どもと出来事を見るという、新たな視点から議論を展開していく。また、本書は中動態による思考的枠組みによって遊びを理論的に解釈することに留まらない。本書後半では、複数の著者により、これまでの保育実践における子どもの「いいこと思いついた」瞬間の出来事が細やかに、記述されている。中動態の観点から描き出される、実際の子どもたちによる「いいこと思いついた」瞬間は実に生き生きと表現されており、子どもたちと子どもたちを取り巻く周囲の環境や人々との関係性の中に、降って湧くかのように訪れる遊びの瞬間について、理解を深めることができるだろう。例えば夏のプールで、友達の声や、太陽の光、蝉の声など周囲の物事との関係の中で子どもが思わず行った泳ぎ方が周囲の子どもたちへも伝播し、やがてプール全体に遊びが広がっていく出来事、また、自然の中に存在する木の棒、水たまり、そして海など、様々な環境や物事と子どもたちとの関係の中で、子どもたちの「いいこと思いついた」遊びの瞬間が織りなされていく。中動態の観点から子どもたちの遊びを見ると、子どもたちの「いいこと思いついた」瞬間が、いかに遊びの至る所に存在するか、そして、子どもを取り巻く環境や事物、人々との関係性の中にこそ生まれ出てくるものかということがよくわかる。本書で紹介されるエピソードを見ることで、子どもの遊びは自発的な存在というのみではなく、周囲の人々や、物言わぬ様々な事物、自然の中の音、光、広大な海など、子どもを取り巻く存在と子どもが向き合い、その関係の中にこそ生まれてくる現象であることが如実に理解できるだろう。

だが、本書を読み進めることで、中動態の観点から、子どもが様々な事物との関係性の中で豊かに遊びを展開していく様子を捉えることが可能となると、同時に新たな疑問が湧く。それは、この本書に紹介されているような子どもの豊かな遊びには、関係性の中に生きる、「中動態における主語」として子どもを見る周囲の大人たちの姿勢、そして、そのような視点を可能とする文化的な土壌が存在するのではないかということである。本書の子どもたちのエピソードでは、子どもたちが人々だけではなく、物言わぬ事物や自然に向き合い惹かれていく様子と、そのような自然や事物との関係性の中で子どもたちの「いいこと思いつた」遊びの瞬間が生まれていく姿が描き出されている。このような豊かな遊びの瞬間が生まれる前提として、子どもが自然や事物との関係を結びやすい雰囲気、それを受け入れる大人たちの姿勢が存在していることが考えられる。つまり、子どもたちが「中動態における主語」としてあり続けることができ、また、大人たちも「中動態における主語」としての子どもたちを見守ることが可能な文化が、日本に定着していることが考えられる。

日本の文化は古来より、自然の全てが神性を帯びるという価値観を保持し続けており、太陽や月、岩、木など、あらゆる自然の事物に至るまでを信仰の対象としてきた歴史的文脈がある。また、自然の事物だけではなく、人工物までも心ある存在として捉え、付喪神といった精霊や妖怪の存在を見出している。現代でも、自らが長年使用してきた愛用品への供養などは日本中至る所で、常日頃行われており、それは、宗教という枠を超えて私たちの生活に深く根ざしている価値観、受け継がれてきた文化であるといえる。このように、日本には、私たち人間が自然や物言わぬ事物に心を向け、想いを馳せ、心をもった存在として関係を結ぶことを受け入れる土壌が存在していると考えられる。日本の保育現場においても、人間と人間を取り巻く全ての事物とが関係を結ぶ様子を自然体で受け入れることができる姿勢、それを認める寛容な文化の土壌が存在するのではないだろうか。本書を頼りに子どもの遊びを振り返ることで、日本だからこそ生まれた大切な「いいこと思いついた」遊びの瞬間を見つけることができるのではないかと考える。